

る為かと思われる、などのエピソードが記載してある。

(発表時は細かい分析を加える予定である)

(独協医科大学名誉教授)

## 明治初期における軍医団と 広島医学会との関係

江川 義雄

明治維新を契機として、在来漢方医学体系を一擲して洋学システムを採用してきた。それは医療史における有史以来の革新であった。その萌芽は幕末より胚胎し、既存の幕藩体制の崩壊と先見性をもった先人達の賢明な選択によるものであった。すぐれた指導性をもった先覚者達は明治初期において、医政・医育・医療・医事など全般に亘り、先進国、独・英のシステムを範として、短期間のうちに、わが国に実現させようと尽力した。

ドイツ医学移入と共に、軍陣医学の経験者でもある医学教師は、その時期に、日本の医育に秀れた臨床医家として目覚ましい活動をし、医学校と軍医養成に一体化した円滑なスタートがみられる。

明治四年に全国に鎮台を、明治五年には陸・海軍省が設

立され、東大医学部は軍医養成に便宜を与え、そこで近代的な医学教育をうけた医師達は抜群のエリートであった。彼等はやがて各地鎮台病院の責任者となり、同時に地方医学会へ学術的影響を与えてゆくのである。

中央から軍都・広島へ赴任した軍医達の組織的活動は、この地における医学黎明期に大きい役割を演じたといえる。概観すると次のように纏めることができる。

① 明治初期の中央集権体制下では、従来の藩医の役割に代行される機能面をもっていた。

② 中央における近代医療の担い手が地方医学会へ学術的活動と新鮮さを与えた。

明治十二年、広島鎮台軍医正、小山内建は着任早々広島県立病院の開院式に祝文を読んでいる。地方医学会が未組織の時代における代表者である。県立病院と軍医団は医学会において指導的地位を保持していた。陸軍軍医のみならず海軍においても同様であった。

広島県医師会発足の原動力になった呉市における明廿会の学術指導者は呉鎮守府海軍軍医大監豊住秀堅であったのは対蹠的に好例である。

伏見の役に従軍した吉田頭三は芸藩の侍がクロホルム麻酔の下に手術された症例を驚きをもって記録している。

③ 広島医学会の充実、発展に積極的に協力し、役員の有力構成メンバーとなり、指導的な立場にあった。

④ 広島は基地的な特殊地帯で、功罪の二面をもち、学術的恩恵を受けた反面、伝染病流行地となり易い側面もあり、伝染病舎の確保は他地区に比して施設や人に恵まれていた。

⑤ 明治二十七年に、日本医学会は、一般軍医の開業医的活動が全国的に目立って来たので、その非難声明を出しているが、当地区においては、軍医団と医学会の関係は極めて協調的であった。

以上のように、明治初期から中期にかけて、軍医団は当地方医療全般にわたって、近代化への新風をもたらし、学術的貢献をし、医学会の発展にも指導的役割を果たしたといえる。

(広島県)